はしがき

また新たな号が刊行される。今回は厳しい査読の網を見事くぐり抜けた18編の論文と１編の研究ノートが掲載されることになった。悦ばしいことである。

言語系と文化系の論文が混在している。集合の考え方からすると、文化の集合に言語が含まれるとみるのがごく一般的だろうが、意外とその両方で使用される言語は必ずしも双方の領域の研究者に共通理解をもたらすとは限らない。それどころか、互いに理解さえできないと言う人もいる。

学問領域の越境を目指しながら、旧来の領域、分野の概念に捉れたままの人も少なくない。専門用語が、領域を規定することすらある。そんな枠を自由に超えて、学問の花を咲かせてほしいと願う。まるですべての病に効く万能薬（panacea）のように、あらゆる領域を横断して倦むことのない分析と考察を繰り広げることはできないものなのだろうか。

そんな夢想に耽りながら、この論集を繙いてしばし甘露に身を浸そう。学問は真理の追究であるといいつつ、その実、夢想の甘い夢に身を横たえてみることとしよう。

2010年２月

『言葉と文化』第11号
日本言語文化専攻長
福　田　　眞　人